

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成 30年 9月 26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長 藤 洋 作 様

所属部局・研究科 文学研究科・文献文化学専攻

職 名・学 年 博士課程後期・3年

氏 名 高橋 佑宜

助成の種類	平成 30年度 ・ 国際研究集会発表助成		
研究集会名	The 20th International Conference on English Historical Linguistics (第20回英語歴史言語学国際学会)		
発表形式	<input type="checkbox"/> 招待 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 口頭 ・ <input type="checkbox"/> ポスター ・ <input type="checkbox"/> その他()		
発表題目	Discourse organizing strategies in Old English: The case of verb-final word orde		
開催場所	英国・エディンバラ・エディンバラ大学		
渡航期間	平成 30年 8月 25日 ~ 平成 30年 9月 2日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	300,000円	
	使用した助成金額	300,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	渡航費	220,700円
		大会参加費及び宿泊費の一部	79,300円
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 今年度の英語歴史言語学国際学会は英国エディンバラでの開催であり、開催時期が行楽のハイシーズンとも重なっていたことから、参加にかかる費用が高額になることが見込まれていました。貴財団の助成を頂き参加することができました。今回の国際学会発表にご支援くださいましたこと、心より御礼申し上げます。		

成果の概要

京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻
博士課程後期3年 高橋佑宜

【学術集会の概要】

学術集会名：The 20th International Conference on English Historical Linguistics

(第20回英語歴史言語学国際学会)

開催場所：英国・エディンバラ・エディンバラ大学

開催期間：2018年8月27日～2018年8月31日

ウェブサイト：<http://www.conferences.cahss.ed.ac.uk/icehl20/>

International Conference on English Historical Linguistics (以下、ICEHL)は1979年から隔年で開催されている英語を中心とした歴史言語学に関する学術集会である。英語に関する歴史言語学や私の専門分野である英語史の国際学会としては最大規模であり、各国・各分野を代表する研究者が最新の研究成果を発表し意見交換する場となっている。さらに、当該分野と密接に関係する学際的な発表が多数行われることも特徴的である。また、ICEHLは開催頻度が隔年であることも特筆すべきであろう。結果的に、向こう二年間に渡る学問の潮流に大きな影響を与える学術集会という性質を帯びている。

今年度は、第20回目という節目の年でもあり、参加者数・発表数は過去最大規模であった。口頭発表と併せて多数のワークショップも開催されたのだが、とりわけ目を引いたのは“Visualisations in historical linguistics” (歴史言語学におけるデータの可視化)、“Qualitative evidence and methodologies in historical linguistics” (歴史言語学における質的エヴィデンスと方法論)、“Computational approaches to investigating meaning in the history of the English language” (英語史における意味の調査に対する計算機的アプローチ)といった方法論についてのワークショップであった。ともすれば個別の言語現象・資料研究に拘泥してしまいがちな私にとって、巨視的な視座を得ることができたのは非常に有益であった。

また、今回のICEHLに参加して肌で感じたことは、初期・後期近代英語(1500年～1700年、1700年～1900年)に対する研究者の関心が世界的に高まっていることである。これまで人力では到底扱いきれなかった膨大なデータを捌く下地が整ってきたことや、多変量の言語データを可視化する方法論が整備されつつあることに伴って、英語史研究の新たなフロンティアが開拓された結果だと言えるだろう。向こう数年間の英語史研究は、1)データの可視化を含む方法論の刷新・精緻化、2)近代英語の「再発見」という二本の軸を中心に展開していくのではないだろうか。

【研究発表の概要】

本発表は、古英語（西暦 449 年～1100 年頃に使用されていた英語）における語順がどのような要因によって決定されるのか、という伝統的には統語論の枠組みで考察されてきた問題を、コーパス言語学の手法を用いて歴史語用論の観点から考察する。本発表ではとりわけ古英語において特徴的な振る舞いをする動詞文末語順に焦点を当てる。動詞文末語順の決定に及ぼす談話的・語用論的な影響については多数の研究があり、その特徴的な機能についても言及がなされている。しかし、分析の多くは限られた範囲の特定のテキストに基づいたものであり、古英語という言語を広く観察した上での分析とは言い難い。そこで、本発表はこれまでより大規模な言語資料を対象として古英語の動詞文末語順を歴史語用論の一つである談話志向的な通時言語学の観点から分析を行うことで、これまでの文献に対して新しい貢献をなすことを試みた。

具体的には、古英語の大規模コーパスである York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose から得られたデータを基にして、動詞文末語順の談話上の機能を a) 節頭要素の談話を結びつける強さ、b) 主語の話題性、c) 動詞の有界性 (telicity) の高さという 3 点から考察した。3 つの性質を高い割合で有するテキストほど物語性の高いテキストである一方で、これらの割合が低いテキストは説明的なテキストであるといえる。加えて、従来の古英語における語順研究ではあまり意識されてこなかったテキストのジャンルという観点も併せて分析を行った。今回は、1) Medicine (医学)、2) Fiction (フィクション)、3) Homilies (説教文)、4) Life of Saint (聖人伝)、5) History (歴史) という 5 つのジャンルのテキストを分析対象とした。分析の結果、a)～c) の性質は 5 つのジャンル間で異なる傾向を示していることが明らかになった。すなわち、1) 医学テキストは説明的なテキストの特徴を最も示している一方で、5) の歴史テキストは物語的なテキストの特徴を最も示しているという結果が得られた。つまり、1) から 5) に向かうにつれて段階的に談話上の継続性が高くなっていくことを実証的に明らかにした。

【謝辞】

ICEHL は私がこれまで参加した学会の中で一番規模の大きな学術集会でした。これまでの研究生活の中で講読してきた文献・論文の著者の方々と実際に話をする機会を沢山得ることができ、とても実りある時間を過ごすことができました。最後になりますが、本学術集会に参加するにあたりご支援を下さいました京都大学教育研究振興財団の皆様ならびに参加の後押しをして下さった諸先生方に心から御礼申し上げます。